日本初上陸「大英自然史博物館展」

錦城高校新聞
特別号
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2017

大英自然史博物館展

「大英自然史博物館展」
3月18日(土)～6月11日(日)、国立科学博物館で開催中（3月27日、4月3日、5月1日、6月5日を除く月曜日休館・祝日の場合火曜休館） 高校生500円です。

過去現在未来をつなぐ博物館の役割

３月17日(金)に上野の国立科学博物館で特別展「大英自然史博物館展」報道内覧会が開かれ、３校の高校新聞記者が選ばれた。日本初の展示も盛りだくさんの博物館展の魅力を伝えたいと思う。

内覧会はテープカットセレモニーで始まった。会場には全国紙をはじめ、多くの報道陣が集まった。

挨拶では、今回の総合監修者である自然人類学者の篠田謙一国立科学博物館副館長兼人類研究部長から、大英自然史博物館から日本で展覧会をやらないかとオファーが来て、２年の準備期間を経て今回の開催に至ったことが紹介された。篠田副館長によると、本展の意義はこれまでの自然史の流れを理解してもらうことで、そのために「自然史の過去・現在・未来」を順に追うことのできる構成となっているそうだ。セレモニー後、報道陣による会場取材が始まった。

生物大好き錦城記者が大興奮したのは、仏の探検家フレーヌが連れてきたゾウガメの標本。推定２００歳の世界最高齢という

セレモニーは博物館展入口で。テープカットには大英自然史博物館の館長も参加した。

副館長に聞く博物館展の見どころ

総合監修者の篠田副館長に見どころなどを直接伺った。

今回の準備は、大英自然史博物館側と英語で交渉しなければいけないことが大変だったと振り返る篠田副館長。若い人たちに教科書に載っている、今や当たり前の事実を証明した実物の品々、先人たちの軌跡を感じてほしいと熱く語る。ダーウィンやウォレスはなぜ進化説を唱えることができたのか。彼らが実際に手にしていた標本などを見て下さいと篠田副館長は話してくれた。篠田副館長はこれから来場する人へ「イギリスは伝統ある科学の国。そこで発展してきたものを支えてきた『本物』の品の数々をしっかりとみてほしい」とメッセージを送ってくれた。

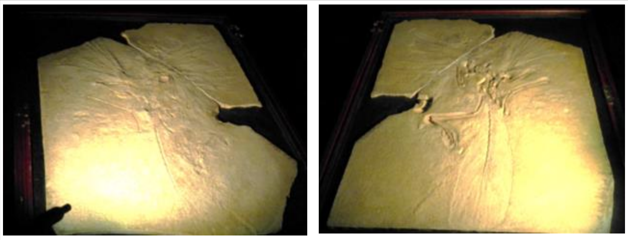
偉大な研究のもとなった標本をぜひ見てくださいと篠田副館長

～大英自然史博物館展とは～

科博の特別展の入り口はイギリスの大英自然史博物館をイメージした内装

今回の展示は、大英自然史博物館の誇る 8000 万点の収蔵標本の中から、世界的にも貴重な「至宝」のコレクション約 370 点を選び、一堂に展示する。同館は伝統的に主要所蔵品の貸し出しを控えてきたため、これが初めての世界巡回展となるそうだ。出品される展示物は動植物、化石、鉱物など多岐にわたり、ほぼ全てが日本初の公開だ。標本を紹介するだけでなく、会場では絶滅した動物などの再現動画も上映している。「始祖鳥」が化石から復元されて大英自然史博物館内を動き出すなど、現実では起こりえない驚きの映像を見ながら、自然史の魅力に触れていこう。（参考：大英自然史博物館展公式ホームページなど）

展示の目玉　日本初！始祖鳥の化石



表裏ともに来日した始祖鳥の化石。翼を広げたその姿から、発見当時は天使の遺体と考えられたこともあるそうだ。

本展示の新聞委員一押しは、初来日の始祖鳥の化石（ロンドン標本）だ。始祖鳥の化石は自然史博物館の全コレクションの中でも最重要級の標本である。

始祖鳥の化石の説明をしてくれた古脊椎動物学者の真鍋真コレクションディレクター（標本資料センター）によると、最初に発見された始祖鳥の化石は１枚の羽毛だけだったが、後に発見されたこのロンドン標本の化石には、羽毛、翼だけでなく、恐竜のように、骨のある尾、そして前肢の鉤爪があった。この化石の発見が、恐竜が鳥に進化したという議論のきっかけになったと真鍋コレクションディレクターは熱く語る。当時の人々は、議論の中で進化に興味を持つとともに、化石の意味を知るようになったという。

今回の展示品は初めてロンドンの大英自然史博物館から日本に来た。真鍋コレクションディレクターは、これから来館するお客さんに「ロンドン標本が来日するのは最初で最後かもしれません。今回の博物館展はきっとどんな人でも必ずわくわくすると思います。ぜひ、そんなわくわくを発見してください」と笑顔で呼びかけてくれた。

 ©錦城高校新聞委員会編集室 2017
錦城高校新聞 特別号 ２０１７年 ３月３０日（木）

今に活きる過去の発見

博物学の歴史を至宝から学ぶ

国立科学博物館動物研究部長であり寄生虫学が専門の倉持利明研究部長は、科学史の発展に大きく貢献した人々を説明してくれた。

例えばジョセフ・バンクスは18世紀イギリスの植物学者。英海軍士官クックが率いて世界を巡ったエンデバー号の探検航海に同行した一人だ。彼らは航海中、南太平洋を中心に様々な植物採集を行った。特筆すべきは、バンクスが航海に画家を同行させたことだ。植物の彩色を詳細に記録し、それ以前の標本集では伝えられなかった現物の色を鮮やかに伝えた。航海後の白黒銅版画集はたちまち増版されてカラー版が待望されたが、その出版が完成したのは２００年後の１９８０年代に入ってからだったそうだ。

「探検がもたらした至宝」でところ狭しと並ぶ、世界一周をしたチャレンジャー号が海洋調査した際に採取した貝殻や海の堆積物

ディスカバリー号によって初めて南極で採取されたコウテイペンギンのうちの一羽

ディスカバリー号に乗ったイギリス人のロバート・スコット率いる南極探検隊は１９０１年、アムンゼンに次いで南極点に到達するまでに植物の化石採集をした。彼らは帰途遭難したが、採集した化石は遺体と共に発見されてイギリスに持ち帰られた。それらの中に、オーストラリアで発見されたものと同種の化石があり、後の大陸移動説を証明する重要な手助けとなった。

時に命を落とす危険を冒しても、彼らは収集に情熱をかけ、科学史に貢献した。倉持研究部長は「やはり不屈の精神を持ったスコットのような人物には憧れますね。バンクスのように諦めず物事が続けられるのもとてもすごいと思います」と楽しげに目を細めた。

科博を支える研究者さんにインタビュー
「幅広い興味で貪欲に視野を広げてください」

博物学者ウォレス（写真）を熱く語る清研究員

「実物を観てください」

アルフレッド・ウォレスを一押しした清拓哉研究者はもともと昆虫採集が好きで、学生の頃は西表島にも行ったという。採集しているときに同じ生物でも模様が違うことに気づき、それが研究者になるきっかけとなった。

将来研究関係の仕事を目指す高校生に「昆虫などは実際に実物を観察してみてください」と呼びかけた。

「様々なことを学んで」

エンデバー号の解説をしてくれた倉持利明研究部長は、水族館のイルカのトレーナーだった。調査のため海でイルカを捕獲した際、船上で解剖をしたときに多くの寄生虫が見つかったのを見て、その研究の道に進もうと決心した経歴を持つ。「いつも前に出ることが大事です」と語る。博物館で働きたいと思う若者に「専門分野はもちろん、色々なことを学ぶと良いと思います」と倉持研究部長はアドバイスをくれた。

31 歳で寄生虫研究の道を決めた倉持研究部長

「自然科学には国境がない」

始祖鳥の解説をしてくれた真鍋真コレクションディレクターは、爬虫類や鳥類の化石が専門。化石を発見し、それが新しい発見に繋がるときにこの仕事が楽しいと感じると話した。「一見、小さな破片のような化石が重要なものだったら嬉しい」と笑顔で語る。

研究者を志す高校生に「自然科学は国境がなく、世界中から自分と同じものに関心を持っている人と話せます。そのため、英語も大切です」と勉強のアドバイスをくれた。

英語が苦手だったという真鍋コレクションディレクター

番外・高校生記者を支える科博事務

今回私たち高校生記者を選出してくれたのは、国立科学博物館事業推進部学習課の松本英和さんと鈴木真紀さんによると、高校生による取材は９回目で、３回前から各校の新聞を科博のHPに掲載している。この企画は、キャリア教育の一環として高校生たちにチャンスを提供するために始まった。事実関係や著作権に注意しつつ紙面のチェックをするのが大変だが、積極的な高校生たちとのやりとりにやりがいも感じるそうだ。

松本さんは「事務の立場から科博を支えるのも大切な仕事だと思っています」と語る。

鈴木さんは長く仕事を続けていくなかで自分の出来ることが増えていったと話し、「目標がまだ決まってなくても、目の前のことを身に着けていくことで将来役に立ちますよ」と笑顔で語った。

科博研究者さんイチオシの先人
博物学者A・ウォレスを知っていますか？

アルフレッド・ウォレスは専門とする清拓哉研究員によると、ウォレスは、東南アジアのボルネオ島とスラウェシ島の間に異なる生物相の境界線を発見した。二つの島は似たような気候だが、調査すると陸続きではなかったことが分かり、生物の分布が異なることが説明できたそうだ。

ウォレスが発見した生物相の境界線を示す二羽の別種の標本

イギリスの博物学者で、生物地理区による分布境界線を最初に発見した。ダーウィンとは別の観点で自然選択説を説いた人物でもある。解説をしてくれた動物研究部陸生無脊椎動物研究グループ、トンボ類系統分類学・系統理地学を

ウォレスは日本ではあまり知られていない。今回は境界線を示す鳥たちの標本なども展示されている。清研究員は「もっと有名になってほしいので、ウォレスの展示を見に来てほしいです」と笑いながらお薦めしてくれた。

むらさき草

展示を見ていると、巨大な化石に目を奪われた。約１万２０００年前の南米に生息していたオオナマケモノだった▼成体は重さ１５００kgにもなったこの草食動物は更新世末に絶滅した。ジャガーの祖先などの肉食獣に捕食されたとも、南米に進出した人類の祖先のためともいわれている▼大英自然史博物館展には、人の手によって絶滅した可能性の高い動物が展示されている。日本に明治までいたニホンアシカもその一つだ。

倉持研究部長によると、毛皮や剥製のために乱獲された。英貿易商オーストンが大英博物館に送った一頭の標本が寂しく横たわっており、見ていて悲しくなった▼人の手で追いやられたオオウミガラス、ドードーなど絶滅種の標本、ねつ造事件のピルトダウン人など、珍しいだけではなく色々と考えさせるものだった▼篠田副館長は「博物館の伝える過去・現在・未来」を強調していた。過去の収集物の意味、現在に訴える意味、そして未来に何を目指すのか▼これからどうすべきか、「未来」につなげていくことが私たちの課題である。（蓮）

絶滅したオオナマケモノの化石